

【実践報告】

「おきひゃく」の遺産と課題 ——聞き書き教育の可能性——

赤嶺 淳
AKAMINE Jun

ものごとには、ある一定の手順をふみさえすれば、予測が可能となるデザインの側面と、想定外の事態への対処をせまられる即興性のつよいアートの側面とが併存する。

大学教育も、その例外ではない。有史以来、人類が積みあげてきた膨大な知識を体系的に教授するのが、大学のもつデザインの機能である。ハードルの高さは問わずとも、一段ずつ階段をのぼっていけば、卒業証書に到達するというわけだ。しかし、ますます混迷を深めつつある現代社会では、そうした「証書」を獲得するための要件が想定していなかった諸問題に対処できる応用力（アート力）が問われてもいる。

「失敗に学べ」、「経験に学べ」とは、よく耳にすることだ。だが、どうやったら「失敗や経験」から学べるのだろうか？ 以下では、わたし自身の大学教育の経験を語るとともに、フィールドワークに魅せられた理由を自問してみたい。具体的には、前任校の名古屋市立大学人文社会学部国際文化学科でおこなった「おきひゃく」というフィールドワーク実習のプログラムを事例として、フィールドワーク教育をデザイン化するにいたった背景と課題について自己評価してみよう。その要諦は、「プロフェッショナル」につきる。アマチュア根性を捨て、「プロ」にちかづくべく、かぎられた予算と時間のなかで、学生同士が切磋琢磨しあう過程を大事にしながら、批判に耐える作品をプロデュースしつづけることである。

実践
報告

1. 「おきひゃく」とは

「おきひゃく」とは、「隠岐の100人」の略称である。その意味するところは、「島根県隠岐諸島に暮らす100人の個人史を、20年にわたって聞き書く」プロジェクトである。

個人史——個人の生きざま——を聞き書くことは、話者の育った生活環境を記述することにはかならず、そうした個別のストーリーを束ねていくことで、その地域社会の歴史を叙述することができる、とわたしは考えている。

隠岐にかぎらず、まちづくりに際しては、個人史の活用が期待されている⁽¹⁾。「こんな地域にしたい」、「こんな社会で暮らしたい」といった地域社会の将来像を語りあうにあたっては、当該社会が歩んできた歴史を人びとの経験から紡ぎなおし、「わたしたちの歴史」をみんなで共有する作

業が必須となるからだ。「おきひゃく」が目指すのは、そうした地域社会の遺産ともいえる、多様な個人史の採録であり、それを地域で共有することである。

島根県は隠岐郡海士町（中ノ島）での聞き書きをはじめたのは、2012年度のことである〔赤嶺監修 2013〕。とはいえ、実をいうと、その時点では、まだ「おきひゃく」のアイディアは明確には意識化されてはいなかった。現地で対応してくれる人びとも負担がかかるし、指導するわたしの興味もうつろうので、それまでのフィールドワーク実習同様に、2年で調査地をかえるつもりであった。しかし、2012年度の報告書を制作する過程で、学生たちから「もっと海士の人びとや海士町のことについて知りたい」、「もっと隠岐とかかわっていききたい」との声があがり、「毎年5人ずつ聞き書きをおこなえば、20年間で100人になるじゃないか！ やってみよう！」という着想にいたったのであった。くしくも、最終年度となる2032年度は、わたしが定年退職する年でもある。初期の「おきひゃく」参加者たちは、アラフォー世代になっており、まさに仕事盛りである。わたしが現役を引退し、地域づくりを次世代にたくすころ、海士町のみならず日本は、どのような社会になっているのだろうか？ その過程を、海士町を拠点に考えてみるのも面白だろう、との思いからはじまったわけである。

後述するように、「おきひゃく」は、報告書として『海士伝』というブックレットを市販している。表向きの監修者や編者は、引率者であったり、実習のコーディネーターをつとめてくれた株式会社巡の環であったりするが、実際の編集作業は、すべて学生がおこなっている。

「おきひゃく」は、すでに22名の聞き書きをおこない、3冊の『海士伝』を編んでいる。だが、78名の聞き書きを残したまま、現在、足踏み中である。というのも、2015年度より新卒予定者を対象とした就職活動の会社訪問の時期が変更となったため、2年生から4年生の混生チームでおこなってきた、それまでのモデル（デザイン）が機能しなくなったためである。したがって、以下は、2013年度から3年間おこなった「おきひゃく」の軌跡をもとにした自己評価である。なお、文中に引用した学生たちの経験談は、特筆しないかぎり、2012年度に参加した学生たちの自己評価によるものである。

2. 国内を歩くことの必要性

1980年代後半、わたしが大学生だったころ、日本列島はバブル景気のまっただなかにあった。沖縄島を中心とした南西諸島では、ビーチやゴルフ場をそなえた1泊数万円もする大型リゾート施設の大開発が進行していた。円高に直面した国内のメーカー各社が人件費の安さをもとめて東南アジアへ進出しはじめた時代でもあり、「アジアの時代」などと喧伝されてもいた。

そうしたことばに踊らされただけなのかもしれないが、春と夏の長期休暇に1、2ヶ月間ほど東南アジアを旅することが、わたしの大学時代のすべてであった。1年生から2年生になる春休みに訪れたタイの激辛パワーに魅せられ、つづく2年生の夏休みにおとずれたフィリピンの混沌さにはまってしまったのである。LCC（格安航空会社）など存在しなかった当時でも、成田空港からマニラやバンコクへは、エジプト航空やパキスタン航空なら、3万9千円で行くことができた。一方、スカイメートぐらいしか正規の割引チケットがなかった当時、沖縄へ行くには、飛行機代だけでも、その倍ほどは覚悟しなくてはならなかった。マニラやバンコクの安宿街で出会ったバツ

クパッカーたちは、たがいに「貧乏人は東南アジアへ、金持ちは沖縄へ」と揶揄しあっていたものである。御多分に洩れず、わたしも沖縄どころか、日本の津々浦々を歩くことなど、学生自体にはほとんどなかった。それほど東南アジアに魅せられていたともいえるし、やはり、日本国内の旅行は高づいた（はじめて沖縄島を訪問したのは30歳のときで、来日したインドネシア人研究者の抱持ちとしてであった）。

そんな大学生時代の趣味が昂じたわたしは東南アジアの離島社会の研究をこころざし、フィリピン大学への留学を経て、縁あって2001年から名古屋市立大学の教壇にたつようになった。自分をふくめ同僚のやり方をみていると、専門分野の差異というよりも、むしろみずからが慣れたしんできた研究のやり方に、教育方法も大きく左右されるようである。わたしはみずからの経験から、東南アジアの詳細な知識を教授するよりも、東南アジアを歩くことの面白さを伝えることがつとめだと考えてきた。自分の足で東南アジアを歩いて感じた疑問を学生たちが自主的にあきらかにしていく過程こそが、真の学習だと信じているからである。教師は、その手伝いをすればよい。

だからこそ、一度ならず学生をつれて東南アジアを旅行してきたわけである（名古屋市立大学で6回、一橋大学で3回）。かつてのわたしが受けたのと同様のカルチャー・ショックが、学生たちの知的関心を覚醒させ、主体的に学んでくれるであろう効果を期待して……しかし、ことばの問題からか、東南アジアへの知識不足からか、過保護すぎたのか、そうしたスタディー・ツアーが、あくまでも「貴重な体験」でおわってしまい、ほとんどの学生たちが、つぎの一步に踏みだせていないことに不満も感じていた。そんな反省から、（学生に逃げ道をつくらせない）国内で本格的な調査を指導してみたい、と考えるようになった。

こうして2007年度のカリキュラム改正を契機に、「国内フィールドワーク」なる科目が誕生した。たしかに国際文化学科と「国際」を冠する学科で「国内フィールドワーク」という科目は奇異にうつるかもしれない。しかし、心配することなかれ。「国内フィールドワーク」と同時に「海外フィールドワーク」という科目も設けられ、インドネシアやイタリアへのフィールドワークが計画されたのである。その心は、「日本を世界のひとつとして相対化してみよう」というメッセージにあった。

東南アジア地域研究を職業とするわたしにとって、みずからの研究を深化／進化させるための手法がフィールドワークである以上、その手法を自分なりに洗練させていくことはあたりまえのことである。しかし、やってみてわかったことは、学生にフィールドワークを教えること／学生とフィールドワークをおこなうことは、自身がおこなうフィールドワークとは別物であるということだ。そもそも、わたし自身がおこなうフィールドワークは、論文を書くという目的がはっきりしている。しかも、すでに調査地での人間関係が確立されており、中長期的な研究計画のなかに毎回の調査が位置づけられている。他方、フィールドワーク実習とはいえば、参加する学生の動機も関心もバラバラなうえ、はじめての土地、はじめての人間関係のなかでおこなう、まさに一期一会のアートなのである。

どこに何人で行くか？ いつ、何日間、行くか？ 何を、どのように調べるのか？ 予算は、いかほどなのか？ 本来は、自分ですべてを決めるべき事柄も、毎年のカリキュラムともなると、こちらでお膳立てをしなくてはならなくなる。「過保護にすぎないか」と問われれば、それまでだ。しかし、これはフィールドワークのイロハ（手順）を教える授業なのであって、フィールドワー

クにおけるアートの完成度を競いあう性質のものではない。第一、宿泊施設や現地での移動手段を考えれば、参加可能な人数もおのずと決まってくる。だから、「どこ」は大事な要件となる。それは、当然ながら、「どんな」実習とも密接にかかわってくる。

さまざまな模索を重ねてきた結果、2009年度から現在の、個人史の「聞き書き」を軸としたスタイル（デザイン）におちついた。2009年度は静岡県御前崎市で「NPO法人手火山編2011」、2010年度・2011年度は石川県七尾市で「赤嶺編2011；赤嶺・森山編2012」、2012年度からが島根県海士町で、という具合である。基本スタイルは、2年生から4年生までの学生3、4名で構成するチーム5、6組が参加し、4泊5日で実施するものである。

3. プロフェッショナルをめざす

ふだん平穏としている地域に、いくら短期間とはいえ、20数名の人間がおしよせることは、迷惑千万なことにちがいない。だから、実習を受けいれてもらうにあたっては、現地とわたしたちをつなぐコーディネーターが必須である。これまでの実習においては、善意（ボランティア）から、コーディネーター役を申しでくれた奇特な方もいる。しかし、基本は、現地にくわしいNPOなり、地域おこしの会社なりと連携したプロジェクトとして実施することである。

当然、お世話になれば、その分の報酬を支払うことになる。コーディネーター役をつとめてくれたNPOなり会社なりが、国や自治体から獲得した補助金から相殺してもらったこともあるし、こちらがコーディネーター料を負担してお願いしたケースもある。「おきひやく」の場合は、3回とも後者である。

大学というのは、不思議なところである。つねづね「いい仕事（研究）には、時間もお金もかかる」ことを力説しておきながら、いざ自分の懐がいたむとなると、相手の慈悲にすがろうとする。「おきひやく」の場合、1回目の2012年度は人文社会学部からコーディネート料を捻出してもらったが、2回目以降は財政難を理由に自活せざるをえなくなった。2012年12月のことで、ちょうど民主党政権末期の空疎な空気が日本中を覆っていた時期のことであった。2012年度の実績どおりに次年度の予算を請求したら、「学科版・事業仕分け」で仕分けられてしまったのだ。「国際文化学科は人類学者を養成するための学科ではないから、そこまで本格的なものである必要はない」といった意見ならば、学科の教育方針にかかわることだし、ひとり異議をとなえても無意味である。しかし、わたしが違和感（と諦観）をおぼえたのは「コーディネーター代の必要性はみとめるが、（利潤追求ではない）教育なんだから、安くしてもらうべきだ」なる意見であった。いくらデフレの世の中であろうとも、ものごとには、正当な報酬というものがあるはずだ。NPOであろうと、株式会社であろうと、プロとして実習のコーディネーターを請けおっているわけだ。「教育目的だから、まけてくれ」などとは、いえるわけがない。さりとて、「お金がないから、質をおとす」わけにもいかず……

捨てる神あれば拾う神あり。金策に東奔西走した結果、幸運にも福岡市の公益財団法人江頭ホスピタリティ事業振興財団が、実習にかかる費用のかなりを負担してくれるというのだ。

まがりなりにもフィールドワーカーとして飯を食っている以上、わたしは、フィールドワークのプロとして学生に接するべきことを信条としている。それは、スポンサーや語り手をふくむ、

調査に協力してくれる人びとへの礼儀でもある。また、「読みやすい文章」を書くことにこだわるのは、語り手に読んでもらうことを意識しているからである。さらには、せっかくの文章を死蔵させず、ひろく流通させるためにプロのブックデザイナーに組版を依頼することも同様の発想からである。

もちろん、出版に凝れば凝るだけ、それだけの予算が必要となる。さきの仕分け作業では、コーディネート料だけではなく、そうした出版にかかわる費用も問題視されたのはいうまでもない。「なぜ、そこまでやる必要があるのか？」と。しかし、大学や役所で刊行される種々の報告書を想像してみてもいい。すべてとはいわずとも、まさにアリバイ的に製本された無味乾燥なものが多いはずだ。それらは、読まれずに廃棄される運命にある。それでは、「おきひゃく」をおこなう意味がない。たしかに「おきひゃく」は、学生が学ぶ場である。実習という意味からすれば、調査法を学ばば、それで目的は達成されるのかもしれない。しかし、「おきひゃく」は、記録をのこすだけではなく、そうした記録が、よりよい社会づくりのために活用されうることを企図したものである。だから、読まれるための工夫と質がもとめられるのだ。

4. 聞き書きの実際と文章作法

フィールドワークと聞けば、現地で調査する光景を想像するだろう。もちろん、現地で収集したデータの質と量が報告書の優劣を決定する主要因となる。だから、現地ですぐず時間は大切である。しかし、調査の準備にはじまり、調査後の報告書の執筆・編集を経て、『海士伝』を刊行するまでの一連の期間のすべてが、「おきひゃく」なのである。

聞き書きとは、学生みずからがインタビューした内容を自分で編集することである。しかし、やってみればわかるが、これが意外とむずかしい。インタビューするには、当然ながら、相手に問いを投げかけねばならない。回答が予想どおりであるとはかぎらない。ここで学生たちのアート力が問われることになる。ぶつ切りの問いと応答のあいだに横たわる、ぎこちない「間」をどう、つくろうことができるのか？ 第一、初対面の人間、しかも自分よりも社会経験の圧倒的に豊富な大先輩と、どのような会話を営むことができるのか？

無事にインタビューが終了したとしても、今度は IC レコーダーに記録された音声を聞きながら、紙上にダイアログ形式のインタビューを再現したうえで、それを読み物としてのモノログ形式の文章に編集する作業がまっている。

IC レコーダーで録音したデータを起こす作業には、忍耐力がいる。慣れないうちは5分の会話を起こすのに1時間かかることもめずらしくないが、慣れてくると30分もあれば十分という域まで熟達する。したがって、3人1組で90分程度のインタビューをおこなった場合、それぞれが6、7時間ほど集中してとりくめば、音声を起こしおえることができる。いくら合宿形式の実習とはいえ、これが作業の限界である。また、こうした作業は、みなが共同してやるから一気呵成にできるわけで、各自が自室にこもってやっていたら、ここまでの集中力は期待できない。

音声起こしで大切なのは、みずからがおこなう質問も、すべて書き起こすことである。やりとりの記録が、あとで編集をおこなう際に、話者の回答を解釈するのに役立つからだ。さきに紹介した学科版・事業仕分けにおいて、「なぜ、そのような非合理的な作業をやるのか」と嘲笑された

苦い経験がある。忘れもしないが、その質問を発したのは、みずからもフィールドでの現場感覚を重視しているという歴史学者であった。

歴史観や方法論のちがいいといえば、それまでである。たしかに語り手を情報提供者とみなせば、語りのなかの要素（事実関係）を拾いあげるだけで十分であろう。そうした手法は、わたし自身のフィールドワークでも採用すること、しばしばである。センシティブな内容を訊くときには、音声どころか、メモさえもとれないこともある。しかし、「おきひやく」は個人史の採録と編集を目的とした教育プロジェクトである。ここでいう個人史は、単に『町史』をはじめとした資料に記載されていない史実を掘り起こすための手段なのではない。個人の人生に寄り添いながら、地域の歩みを読みとろうという、方法論的試みである。第一、個人史は、語り手が一方的にみずからの人生を語ったモノログではない。聞き手から投げかけられた問いについて語り手が応答する過程で創発したダイアログである。しかも、最終的に語り手が目をとおすとはいえ、編集は聞き手がおこなうときている。そうだからこそ、どのような問いが、いかなるタイミングで発せられたのかが、語りを解釈するうえでの大切なポイントとなる。

具体例をあげよう。個人史を編集する際、わたしは、「インタビュー内容をいくつかのグループにわけ、そのなかでもっとも感動した部分を中心に、物語を再構成しなさい」と指導する。KJ法よろしく、大きめの付箋を利用し、キーワードやイベントを整理し、語りを分節化していくのである。実習をやっていて気づいたことだが、どうも、感動したポイントが、おなじ空間にいた人間のあいだで異なるようなのだ。というのも、通常のフィールドワークの場合、ひとりでインタビューをやり、その解釈もひとりでおこなうことになる。だから、これまで話者の語りの解釈について、別の可能性を考える余地など存在しえなかった。このことを、学生たちは、つぎのように述べている。

少人数の班編成であることで、学生同士がより深く議論を交わすことができる。不思議なことに、同じ空間で同じ話を聞いていても、語りの解釈にはそれぞれ差異がある。編集作業の過程で意見が対立することも、しばしばあった。相手との合意点を見つけ、班としての総意をつくりあげていくことは容易ではない。しかし、何度も録音を聞きなおし、互いの意見をぶつけていきながら、かたちになっていく喜びと達成感には、大きなものがあった。それぞれの学生の個性が班の個性となり、原稿のオリジナリティを生みだすひとつの要素ともなっている。[赤嶺監修 2014：190]

このオリジナリティの追求という意味においても、聞き書きは、日本語文章術の最適な練習ともなりうる。というのも、もともとの声音の連鎖を、どのような日本語で表記するかは、漢字とひらがなの表記バランスの検討にはじまり、句読点の位置など、文体を左右する問題とも無関係ではありえないからである。話者の口調を最優先させながらも、ある程度は方言も標準語に置換しなければならない。また、地域の文脈を知らない読者のために注をつける必要もある。読者を想定して、徹底的に読みやすさを追求した文章と文体を模索することになる。

こうした経験を一度でもつんでおけば、日常的に目にする新聞や書物の文章を単なる情報源としてとらえるだけでなく、文章作法の事例という別な角度からも鑑賞できることとなり、この

意味においても、聞き書きの実践的な教育効果はあきらかである。

漢字にできるところをすべて漢字にしてしまえば、語り手の生の言葉がなんだか別物にみえてしまうこともある。ひらがなの独特のやわらかさというものを生かしつつ、かつ適所に漢字をつかい、読者の読みやすさを考慮することも、すべて編集するものの責任につながる。

ふだんから漢字の統一や文体を意識するようになりました。そうすると、体裁がととのった文章は、見た目によつてだけでなく、内容が頭に入ってきてやすいことに気づきました。逆に、一般に売られている本に誤字脱字や表記のゆれを発見すると、「なんだか失礼だな」とか、「あまり信用できないなあ」と思うようになりました。

柳田国男が1930年に発表した「鼠の浄土」では、(タイトルの)ネズミを「鼠」と表記しているのだが、(文中には)カタカナで「ネズミ」となっているところが数カ所ある。「それはなぜだろう」と考えてみることは、読み物を批判的に読むということの、第一歩になるのではないだろうか。

ここで紹介したもの以外にも、学生たちの自己評価を読むと、心をうたれるものが少なくない。とくに聞き書きの経験が2度、3度もあるリピーターになればなるほど、みずからの反省点を日常生活のレベルで克服してきたことがわかる。自身の経験から市販の書籍の質にまで言及できたり、柳田の文章について洞察できたりすることは、直接的に「聞き書き」体験とむすびつくわけではない。しかし、「書く」という行為を通じ、日常生活においても「読む」という行為をより能動的にこなせるようになった証左である。こうした学生の鏡のような優等生も、かつては、以下のような幼稚な存在だった。

実習後、考えるようになったことがひとつある。それは、いかに自分がこの大学2年半を受動的かつ消極的に過ごしてきたか、ということであった。「いろいろな世界のことを知りたい」とか、「いろいろな知識を得たい」という思いから多岐にわたるテーマの授業を受講し、そのすべてで単位を落とすこともなく、自分としてはまじめな大学生活を送っているつもりであった。しかし、いま振り返ると、実態としては、月曜は月曜の授業を受け、火曜は火曜の授業を受け、その日の授業のことは宿題がある場合を除いては次の週まで手をつけず(つまり予習・復習・補習のいずれもしてこなかった)、その週に話される新しい知識をただ記憶し、レポートやテストを課されるとレジュメやノートを再構成して文章にするという、高校までとまったく変わらないスタイルが定着してしまっていた。

残念ながら、このような学生は少数ではない。大学生のほとんどが、高校までと同様に、講義と講義の関連性をなんら考えることなく、科目ごとにぶつ切りにされた知識を、そのまま無批判に鵜呑みにしているのが現実である。「視野を広くもちささない」、「多面的に思考しなさい」といくら指導しても、学生たちが自分から殻をやぶろうとしない以上、小学校から高校までに蓄積され

た学習姿勢はあらたまることはない。そうした学生の一ひとりだった仙石エミは、聞き書きに初参加した大学3年の1年間の学習をふりかえり、以下のように自己評価している〔仙石 2011（傍点引用者）〕。

さて、一年を振り返って自己評価をしよう。ひと言でいうなら、考えが浅い。これに尽きると思う。考えていないわけではないし、自分ではそれなりに考えているつもりでも、ほかの学生の発表を聞いたとき、自分の考えがまだまだ浅いなあ、といつも思うのだ。たとえば、同じ部分に着目しているのに、ほかの人はまったくちがう視点を持っていたりするし、著者の伝えたかったことはもっとほかにあるのではないかと気づかされることもしばしばであった。本を読んで「知る」ことはだれでもできるが、わたしは「知る」から「考える」にうまく結びつけることができなかった。できないというよりは、いままでやうてこなかったのだ。やればできるようになると信じて、これからどんどん考えを深めるくせをつけていきたい。これが最大の反省であり、最大の収穫である。

5. どのように生きていくのか？——おわりにかえて

海士町で実施する聞き書きは、学生にフィールドワークのイロハ（手順）を教え、フィールドワークの面白さを体験してもらうことを目的としている。だから、参加者のなかには、「なにもフィールドワークのプロを目指すわけでもなし、まあ、こんなもんじゃん」と甘えるものがなくもない。

しかし、フィールドワークを受け入れる地域としては、ボランティアの学生だろうが、調査を依頼したコンサルタントだろうが、きちんとした成果をもとめることにちがいはない。また、いい加減な態度で臨むことは、海士町に居住し、コーディネーターを勤めてくれている巡の環にも、迷惑なことにはちがいない。だからこそ、すべての会話記録を起こしたベタの作成にはじまり、構成・編集、発行にいたるまで、手抜きがちとなる作業をおろそかにせず、ひとつひとつの作業を丁寧かつ慎重におこなう愚直さが聞き手にはもとめられる。

こうした、幾多のハードルを乗り越える過程で、ほとんどの学生が聞き書きの魅力にはまってしまうのは、なぜなのか？ もちろん、脱稿し、校正をかさねた報告書を手にすれば、それまでの苦労も水泡に帰すというものだ。しかし、聞き書きの魅力は、達成感だけではない。哲学をもち、それを実践されてきた話者の人柄や生きざまに惹かれてしまうのだ。ほとんどの学生にとって、就職活動は、学生時代の最大のイベントである。就職活動を終えて参加した学生は、次のように聞き書きをふりかえっている。

隠岐では、だれもが自分の将来のことを考えたと思う。どんな職業に就くか、ということだけでなく、どんな生き方をするかを真剣に夜中まで話し合った。聞き書きを通して人の人生と向き合うことは、自分の人生と向き合うことでもあるのだと、今回、実感した。

わたしも学内業務のローテーションの一環として就職委員を務めた経験がある。本来、こうした多様な人生譚を学生に提供し、長期的視野にたってキャリアを構築していくよう指導すべきで

あることは理解していても、実際の指導は就職活動のテクニックばかりに終始しかねないのが現実である（わたしをふくむ教員のほとんどが企業への就職活動を経験していないにもかかわらず、である）。だからこそ、就職活動を終えた学生が、これから就職活動に挑戦する学生たちに、聞き書きを通じて生き方について考える機会を提供できることは、貴重なものだと思っている。

しかし、そんな「おきひゃく」も、現在、休憩中である。わたしが異動してしまったことが大きいし、2015年度より就職活動の開始時期が変更を繰り返しているからでもある。こうした事態をうけ、「おきひゃく」は、4年生抜きで実習を構想しなくてはならなくなった。もちろん、やれないことはない。しかし、問題は、技術の継承と質の確保である。「おきひゃく」は、2年生で初参加し、3年生で実質的なリーダーを経験し、その経験を活かして4年生が後見人をつとめるというデザインで機能する、サークルのようなものである。就職活動を批判しているのではない。就職活動で経験した挫折もまた、当該学生の人間力を増す契機となることはまちがいない。そうした経験を経た4年生が参加することで、聞き書きという「人間」と「人間」が対峙する場の空気がしまるのだ。

それがかなわない今日、「おきひゃく」は、一時停止中である。しかし、それはあくまでも大学側の事情によっている。隠岐の人びとのくらしは、大学の事情とは無関係に営まれている。だから、いつまでも様子見とはいかないことは承知している。実施時期を変えてみようとか、大学院生や社会人を中心に組んでみようなどと構想してはみるものの、まだ次なるデザインを描ききれていないのが現状である。その意味では、まさに、わたし自身のアート力が問われているわけだ。これまでの成功譚を越え、つぎなる「失敗に学ぶ」時期にさしかかってきたようである。

【付記】

「おきひゃく」の1年間の流れは、以下のとおり。

- ・2月 次年度のテーマを検討する〔テーマに沿って巡の環が、話者の候補をさがす〕。
- ・4月 参加者募集開始。
- ・5月 班分けと責任者の決定・巡の環が選んでくれた話者のなかから担当話者を決定。
- ・6月 代表者による海士町訪問、あいさつ〔話者に手紙を送付〕。
- ・7月 テーマにそった下調べと話者にそった質問項目の検討。
- ・8月 本番。
- ・9月 トランスクリプションの編集（ひとり語りへ編集した後に、文脈を整える）。
- ・10月 入稿（この間、編集責任者が用語、漢字／かなの統一をおこなう）。
- ・11月 初校ゲラのチェック。
- ・12月 2校チェックを経て、冬休み前に校了。
- ・1月末 報告書完成時に「おきひゃく」に関連するワークショップを開催し、次年度のオリエンテーションにかえる。

【注】

- (1) たとえば、愛知県高浜市では、「市民のため」の歴史ということで、市民が自分たちの経験を「聞き書き」し、『高浜市誌』に収録するというプロジェクトが実践された。詳しくは、本誌に掲載された佐野直子の論考を参照のこと。

[参考文献]

- 赤嶺淳編, 2011, 『クジラを食べていたころ——聞き書き 高度経済成長期の食とくらし』グローバル社会を歩く①, グローバル社会を歩く研究会.
- 赤嶺淳編, 2013, 『バナナが高かったころ——聞き書き 高度経済成長期の食とくらし2』グローバル社会を歩く④, グローバル社会を歩く研究会.
- 赤嶺淳監修, 2011, 『七尾に生きる——能登の宝は、人』、名古屋市立大学赤嶺研究室.
- 赤嶺淳監修, 2013, 『海士伝 隠岐に生きる——聞き書き 島の宝は、ひと』グローバル社会を歩く④, グローバル社会を歩く研究会.
- 赤嶺淳監修, 2014, 『海士伝2 海士人を育てる——聞き書き 人がつながる島づくり』グローバル社会を歩く⑥, グローバル社会を歩く研究会.
- 赤嶺淳・森山奈美編, 2012, 『島に生きる——聞き書き 能登島大橋架橋のまえとあと』グローバル社会を歩く②, グローバル社会を歩く研究会.
- 株式会社巡の環監修, 赤嶺淳・佐野直子編, 2015, 『海士伝3 海士に根ざす——聞き書き しごとでつながる島』グローバル社会を歩く⑨, グローバル社会を歩く研究会.
- NPO 法人手火山編, 2010, 『カツオでにぎわったころ——聞き書き 御前崎の歴史』、NPO 法人手火山.
- NPO 法人手火山編, 2013, 『伝統的鯉節製法手火山——海に生きたふるさと その歴史と未来』、鉾脈社.
- 仙石エミ, 2011, 「考えることにおわりなし」『地域研究年報』8: 214-215.

謝辞

「おきひゃく」は、海士町のみなさんの厚意にささえられていることはいまでもありません。また、参加した学生のみなさんの熱意があつての事業です。また、「おきひゃく」を財政的にささえてくれた公益財団法人・江頭ホスピタリティ事業振興財団と『海士伝』出版のサポートをしてくれた新泉社をはじめ、さまざまな支援あつてのことです。「大学の社会貢献」などと上から目線ではなく、海士町のみなさんに教えられ、鍛えられる機会をありがたく思っています。ちかいうちに再開したいと思っています。これまで支援くださったみなさんに感謝するとともに、さらなる支援をお願いする次第です。

(あかみね じゅん, 一橋大学大学院教授 / akamine.jun@r.hit-u.ac.jp)